

## 私のでんかん研究と学会での活動

小島 卓也（大宮厚生病院）



### はじめに

てんかん研究は今振り返ってみて十分な研究を行ったとはいえないがそれなりの思い出がある。また学会においては理事としていろいろな役割を担当させてもらった。てんかん治療研究振興財団からは研究費をいただき、研究報告会に参加させていただいた。これらについて記憶に残っていることを述べてみたい。最後に精神科医とてんかん診療の関係について思うことを述べてみたい。

### 私のでんかん研究

「目は心の窓」、「目は口ほどにものをいう」などと言われているが、私共は統合失調症の探索眼球運動の研究を行ってきた。対象物を見ているときの目の動きすなわち注視点の動きである。S字型の幾何学図形を提示して「後で描いてもらいますからよく見てください」と指示を与えた後の注視点の動きを調べた。さらに、標準のS字型図形と少し異なった図形を示して標準S字図形との違いを質問し、違いを答えた後に、さらに他に違いはありませんかという念押しを質問をし、その時の注視点の動きに注目した（反応的探索スコア）。これは「違いがない」という自分の答えを確認するような注視点の動きで、自分が行った行為に対して、主体的に確認しようとする被験者の姿勢を表している。さまざまな精神疾患と比べて統合失調症ではこのスコアが有意に低く主体性の障害を反映している。ところが患者だけでなく家族でも低く、素因も反映していると考えている。てんかん患者で発作が残存し長期に経過していると幻覚や妄想が出現してくる場合がある。これをてんかん精神病と呼んでいるが、このような人々に上記の検査を行うとスコアの値は統合失調症と健常者の間に位置していた。てんかん精神病になる方々は統合失調症になりやすい素因を有しているのではないかと考察した。

### てんかん学会での活動

学会の活動は、平成9年6月からてんかん学会の理事として平成21年まで務め、平成22年に名誉会員にいただいた。財務委員長（平成9年～13年）、てんかん研究編集委員長（平成13年～16年）、法的問題検討委員長（平成16年～平成19年）、分類・用語委員会委員長（平成19年～平成21年）として携わってきた。法的問題検討委員長のとときに、2002年に改訂されたてんかん患者の運転免許の実施状況をみながら次の改定に向けての準備を行った。諸外国の運転免許状況を調べたことを思い出す。またてんかん患者の救急時のために発作型や発作時の対応を記した小さなカードの作成を行った。これはあまり利用されなかったかもしれない。

分類用語委員会では、新しいてんかん発作の分類について対応した。これまでの発作の分類は1981年に発表され、てんかん（てんかん症候群）の分類は1989年に発表された。これらは長年臨床でも研究でも使われてきた。しかしてんかん研究の進歩に伴って2001年に国際てんかん診断大要案が出され、2006年に一部修正追加した提言が出された。これらについてこれまでの分類と比較検討した。これまでの発作分類やてんかん分類に馴染んでいたので、新しい分類が日常臨床や研究に使用されるにはまだかなりの時間がかかると思われた。また分類・用語委員会では、てんかん用語集の改定も行った。

た。てんかんについての臨床や研究で症状や診断を記載する場合に専門家や医療関係の方々を書いた記載が、他の医師や関係者、あるいは研究者に正しく理解して貰わないと情報交換ができない。そのためてんかんに関する用語を統一し、使い方も一致させる必要がある。そこでこのような目的のために英語（ごく一部はドイツ語、フランス語）—日本語、日本語—英語（ドイツ語、フランス語）というように専門用語を書き出し対にして並べてある用語集である。 忘れた用語や詳しい綴りを確かめるとき、用語の使い方を調べる場合などに利用されている。ときどき改訂が必要で約4年ごとに改訂を行っており、平成2009年に改訂して刊行した。委員の人たちが集まり分担して検討したものを持ち寄り何度も検討したことが懐かしく思い出される。

#### てんかんと精神科

上に述べたてんかん精神病は精神科医が診ていると思うが、一般のてんかん患者を精神科で診ることが少なくなった。これは神経内科、小児科、脳外科の医師が積極的に診ており、それに比べて精神科の医師がてんかんを積極的に診ていないともいえる。しかし、てんかんは慢性の疾患であり、病気を抱えながら日常生活、社会生活を送らなければならない、いろいろな悩みや葛藤を伴ってくる。もっと精神科医がてんかん患者の悩みに応えていけるのではないかと思う。もちろんてんかんの専門的な診断・治療技術を身につけなければならないが、精神科医が精神科的な知識や対応によっててんかん患者のより良い生活を送ることに貢献できると思うからである。

#### おわりに

てんかん治療研究振興財団の皆さまには大変お世話になった。毎年の研究報告会には必ず出席して楽しく勉強させてもらった。改めて感謝したい。